

西鶴の人生観と教戒

服部嘉香

井原西鶴(一六四二—一六九三)の描いた世界は色と慾と金と義理の世界であった。それらはそれぞれ彼の作品の世話物(好色物)・町人物・武家物の中心特色をなしているのであるが、町人物には、特に元禄の世相・人情・経済・商業の各般にわたってありのままに描かれているので、町人物の三部作『日本永代蔵』・『胸算用』・『西鶴織留』などは、文学作品として傑出してはいるばかりでなく、経済史研究の上に得難い資料となり、生きた文獻となつてゐる。もちろん小説のことであるから、作り話が多く、断片説話の全部が当時の事実を伝えたものとはいえないにしても、元禄時代の現実は、虚実共に微に入り細を穿つて、ありありと描かれてゐるのである。

元禄時代は、一口に奢侈・遊惰を極めた時代とされてゐる。しかし、この時代ほど複雑・多彩を極め、特に経済活動の面から見て興味ある時代はないといつても過言ではない。御朱印船貿易以来の金銀流出により、慶長金銀は改鑄されて等価・劣質の元禄金銀となり、

営業の独占・排他を許した「座」の制度は、自由主義下の資本主義発達を促し、大尽・成金(成上り銀持)^{かねもち}の輩出となり、町人の勃興・横暴となり、その半面、武士の没落、武士道の頹廢を来し、倉屋敷を舞台とする武士と町人との交渉に始まつて、各藩の財政と町人との不拔関係となり、当時の社交場ともいふべき遊廓に芽生えた義理人情の情類は、やがて武士道に代る町人道德としての義理道・人情道となるなど、興味津々の変遷は、走馬燈のように眼前を回転する。

西鶴の人生観は、「人の情は一分小判のあるうちなり。」とか、「人は慾に手足の付いたものぞかし。」とある皮肉な片言・隻語によつても知られる。しかし黄金万能主義を謳歌する者のように見えるが、彼の本旨は、黄金万能主義を戒めるにあつた。黄金成功者を挙げる時は、必ずその成功の原因を、勤勉・節約・才覚・正直・慈悲の如きに帰し、これに反する悪商や、贅沢・遊蕩・飲酒の徒は多く失敗者・零落者として描いている点を見ても、彼の意図のあるところを察するに難くはないが、それも決して安価な勧善懲悪ではない。

く、成功談・失敗談共に、華麗・自在な筆致を以て、ありのままに描き、その間に、「無理なる慾は必ずせまじき事ぞかし。」とか、「世に女房去る程、身代の障りになる事なし、女もまた二たびの縁づき、必ず初には劣るべし。」とか、「商人職人によらず、住みなれたる所を變える事なかれ。石の上にも三年と俗語に伝えし。」とか、「人は智慧才覚」、「人は正直を本とすること、是れ神國の習はせなり。」とか、「大節季の聞き事は、秋の比の月夜より知れたる事を、人皆差当りて之を驚きぬ。」などいふ類の教戒は、砂中の金の如く、しかも無数に散在して、世道・人心に光を与えている。これは町人物に限らず、世話物・武家物にも同様であつて、要するに、彼の作品は、従来單純に考えられているような軟文学ではなく、むしろ經濟文獻と人生読本とを兼ねた硬文学作品として、見直すべき価値があるのである。

作品の中から、その実証となるものを幾つか紹介してみよう。

二

町人物の中でも「日本永代蔵」は最も傑作とされているのであるが、一名を「新長者教」といった。その当時、商人が勤儉・力行、成功して長者となる途を説いた「長者教」と称するものが広く読まれていたので、西鶴流の商人成功談を集めたものを、それに倣つて「新長者教」と呼んだのである。その第一話には、冒頭に、

士農工商の外、出家神職に限らず、始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜むべし。これ二親の外に命の親なり。

と訓え、江戸小網町舟問屋の主人の成功談を伝えている。荒筋は、——泉州水間の水間寺では觀音に參詣する人々を相手に金貸をしていた。今年一錢借りて来年二錢にして返し、百文借りれば二百文返す約束であるが、觀音の錢というので借倒しをする者もなく、それもたいていは「五錢、三錢、十錢より内を借りけるに、ここに年の頃二十三、四の男」が来て一貫（一千文）貸せという。寺僧は、いうがままに所も名も尋ねず貸し与えたものの、多少の不安を感じ、以後は大金を貸すこと無用と申合せをして、「この錢濟むべき事も思われず」と諦めている。その借主が舟問屋の主人で、水間寺の話を聞き伝えて、遙々借りに出向いたのであるが、帰ると、獵師の出船に觀音の錢と告げて百文ずつ貸したところ、借主は自然の御利益を受けて儲が多いという話が広まり、貸金大繁昌して、「毎年一倍の算用につもり、十三年目になりて元一貫の錢八千九十二貫にかさみ、東海道を通し馬につけ送りて御寺に積み重ね」たので、寺僧は驚き且つ喜んで、彼のため、また記念のために、寶塔を建立したというのである。一年一割の利息を添えて十三年目に返すとなれば、元利合計八千九十二貫となるという事実だけを見れば、西鶴の教戒は「それ世の中に借錢の利足ほどおそろしいものはなし。」となるのである。ここでは、仕末と商略と努力について教戒としたのであるが、その終末に、「惣じて親の譲りを受けず、其の身才覚にして稼ぎ出し、銀五百貫目よりして之を分限といえり。千貫目の上を長者とはいふなり。此の銀の息より幾千萬歳樂と祝えり。」と結んであるのは、当時の富の程度を知るたよりとならう。

第二話の書出しは、

人の家にありたきは梅、桜、楓。それより金銀、米銭ぞかし。

というのであるが、これも真意は黄金礼讃ではなく、平素の用意を訓えたもので、「一代に二千貫目したためて行年八十八歳」で死んだ長者の子、二十一で家督を嗣ぎ、放蕩に身を崩し、五年目に身代を潰したという筋を語り、これには西鶴自身は批評を沈黙し、「人は知れぬものかな、見及びて四五年このかたに、二千貫目塵も灰も無く、火吹く力も無く、家名（屋号扇屋）の古扇残りて、一度は栄え一度は衰ふると、身の程を誦うたひて一日暮しにせしを、見る時、聞く時、今時は儲けにくい銀をと、身を持ち堅めし鎌田屋の何がし、子供に是れを語りぬ。」と、庭訓に託して放蕩の戒としている。

第三話は、前半は大阪北浜過書町、米穀の取引に成功した泉州商人の話。後半はこぼれ米を拾うて、一代のうちに家蔵を建てた女の話。――二十三の年から後家となり、一人子の成人を楽しみにしている老女が、北浜に西国米を舟揚げする折にこぼれ落ちた米を塵ごと掃き集めて、

……朝夕に食いあまして一斗四五升溜まりけるに、これより慾心出で来て始末をしけるに、はや年中に七石五斗延ばしてひそかに売り、明けの年なほまた延ばしける程に、毎年かさみて二十余年に^{ほそ}胸くり金十二貫五百目になりぬ。

物凄いいことをしたものである。大阪の盛り場には「地見」と称する専門の拾い屋があるが、恐らく、この老婆あたりが先駆者なのであらう。

第四話には、三井・三越の先祖三井九郎右衛門の商売上手が紹介

西鶴の人生観と教戒

してある。よろず現銀売、掛値なし、裂地切売、利発手代四十余人を追い廻して一人一色の役目、これが当たって、「さによつて家栄え、毎日金子百五十兩づつならしに商売をしけるとなり。」と西鶴は感心しているが、わが国においてすでに早くデパートメント・ストアの萌芽があったことになる。

『胸算用』は、これはまた西鶴全作品中の傑作といわれるものであるが、題名の脇書に「大晦日は一日千金」とある通り、一年の遣り繰り、今日一日に迫つた年の瀬の苦勞を主題とした小話集で、当時の商人の経済生活が如実に描かれている。第一話は「問屋の寛瀧女」と題し、冒頭には、

世の定めとて大晦日は闇なること、天の岩戸の神代このかた知れたることなるに、人皆常の渡世に油断して毎年一つの胸算用違い、節季を仕舞いかね迷惑するは、面々覚悟悪しき故なり。とあり、本文は「十貫目が物を買うて八貫目に売って、銀廻しをする才覚、詰まる所は内証の弱り」を切抜けるため或問屋の亭主、振手形を濫発して、両替屋へ預けた銀二十五貫目に対して八十貫目余りの融通をつけたという話。この振手形は約束手形・為替手形・小切手の始まりで、両替屋の仕事は今の銀行の預金・為替課の事務に当たる。それも相談づくでなく、破れかぶれの非常手段で、

霜月の末より、二十五貫目、ねんごろなる両替屋へ預け置き、大払いの時、米屋も、呉服屋も、味噌屋も、紙屋も、肴屋も、観音講の出し前も、揚屋の銀も、乞ひに来る程の者に、其の両替屋で受取れと、振手形一枚づつ渡して、萬づ仕舞うたとて年

籠の住吉参り、胸には波の立たぬ間も無し。

住吉神社は海路平安を祈るところ、この亭主は、そこに渡世安全を祈ったのである。海に因む神だから「波の立たぬ」と利かしたあたり、西鶴の技巧の細かさであるが、二十五貫目預った両替屋では、八十貫目余りの手形が殺倒したので、

両替には算用差引いてから後に渡そう、振手形大分ありと、さまざま詮議する中に、また掛乞も其の手形を先へ渡し、また先から先へ渡し、後にはどさくさ入り乱れ、埒の明かぬ振手形を、銀の代りに握りて年を取りける。一夜明くれば豊かなる春とぞ成りける。

まことに遣り繰り朗らかな新年を迎えて、あとはどうなったか、書いてない。

巻二の第一話に、「人の分限に成る事、仕合わせという言葉、まことは面々の智慧才覚を以て稼ぎ出し、其の家栄える事ぞかし。」とある、これが全篇を貫ぬく趣意とも見られる。その第四話に、掛取に手腕を示した十八・九の角前髪すみまへかみの小者が、自分の掛は取っておいて掛乞撃退法を教えて行く滑稽も、やはり才覚の一話としているのであろう。

『西鶴織留』は、「本朝町人鑑」・「世の人心」の二部から成っており、西鶴没後の出版である。晩年の作だけに、世相の表面を描くよりは人情の機微を捉えた傾向が著しく、商業にも商機・商略の秘訣に触れたものが多い。

同じく死後の出版に『西鶴置土産』がある。文品は落ちるが、やはり町人生活に縁があり、その他、『新可笑記』、『本朝二十不孝

』・「昼夜用心記」等にも、町人生活の描写が交り、さりげなく挿入する教訓・諷刺の名文句も、至るところに光っているのである。

三

もっとも、西鶴の作品の町人物の全部が教訓・諷刺を骨格としているわけではない。時代・世相のありのままを描いた写真の妙において、空前絶後の簡潔・軽妙、しかも華麗を極めた筆致を見せ、さながらその時代に住む思いを懐かせる文の引力、そこに彼の作品を不朽ならしめる命の源があることは争われない。したがって、奢侈の実際、遊惰の風俗、商人の悪計も義理固さも、武士の零落も義理固さも、江戸・大阪の経済界の変遷も、手に取るように明瞭にされるのである。

惣じて北浜の米市は、日本第一の津なればこそ、一刻の間に五萬貫目の立てり商（空米相場）もあることなり。其の米は蔵々に山を重ね、夕の嵐、朝の雨、日和を見合わせ、雲の立ちどころを考へ、夜のうちの思ひ入れにて売る人あり、買ふ人あり。一分二分を争ひ、人の山を為し、互に面を見知りたる人には、千石、萬石の米をも売買せしに、兩人手を打ちて後は、少しも是れに相違なかりき。世上に金銀の取り遣りには、預り手形に請判、確かに何時なりとも御用次第と相定めし事さへ、其の約束を延ばし出入になる事なりしに、空定めなき雲を印の契約を違えず、其の目切に損徳を構はず売買せしは、扶桑第一の大商人の大腹中にして、其れ程の世を渡るなる、難波橋より西

見渡しの百景、数千軒の間丸（間屋）疊を並べ、白土雪の曙を奪ふ。杉ばえの俵物山もさながら動きて、人馬に付け送れば、大道轟き、地雷の如し。（『永代蔵』）

何よりもまず描写のうまさには、いうべき言葉もない。このように萌芽時代を西鶴に描かれた堂島米市場も、昭和十四年十月、国策会社日本米穀株式会社にその業務を移譲して消滅したわけであるが、感慨今更である。

また、西鶴は、当時の商家の商号をしぼしば書き残している。

江戸は天下の町人北村、奈良屋、樽屋をはじめ、諸国の惣年寄金座、銀座、朱座、此の外過書の舟持、世上に名をふれて、是れ皆町人中の町人鑑といへり。（『藏留』）

商人あまにあるが中の島に、岡、肥前屋、木屋、深江屋、肥後屋、塩屋、大塚屋、桑名屋、鴻池屋、紙屋、備前屋、宇和島屋、塚口屋、淀屋など、此の所久しき分限にして商売やめて多く人を過しぬ。（『永代蔵』）

これらは何気なく並べてあるようであるが、

惣じて大阪の手前よろしき人、代々つづきしにはあらず。大方は吉藏、三助が成上り銀持になり、其の時を得て詩歌、鞠、琴、弓、琴、笛、鼓、香会、茶の湯もおのづからに覚えて良き人づきあい、昔の片言も失さりぬ。（同）

となると、世相躍如、人一代の運を目の前に見る心地がする。

商人の悪を写すにも、彼の筆は極めて淡々として且つ辛辣である。例えば、『新可笑記』には、同じ実物が二軒の家にあつたという複雑怪奇な事件が暴露して、その縁故によって仕官した二人の武

西鶴の人生観と教戒

士が、義を重んじ、互に刺し違えて死んだという悲痛な事件が淡々と書かれている。その原因は、「今時、世を渡る業として工み恐しき商人」がごまかしを遣つたためであつた。『永代蔵』には、海外貿易の闇を辛辣に伝えた一節がある。

唐土人は律義に言約束のたがはず、絹物に奥口せず、菓種に紛れ物せず、木は木、銀は銀に幾年拘はることなし。ただひするは、次第に針を短く摺り、織布の幅を縮め、傘狡こきは日本、銭安きを本として売渡すと跡を構はず、身にも油を引かず、銭安きを本として売渡すと跡を構はず、身からぬ大雨に親でも、既足になし、ただでは通さず。むかし対馬行きの煙草とて小さき箱入にして限りもなく時花り、大阪にて其の職人に刻ませけるに、当分知れぬ事とて、下積み手抜きして然かも水に浸し遣はしけるに、舟渡りの中に固まり、煙の種とはならざりき。唐人これを深く恨み、その次の年なほ又過ぎつる年の十倍も誂へければ、慾に目のあかぬ人、我れ遅しと取急ぎ下しけるに、大分港に積ませ置きて、去年煙草は水に湿され思はしからず、当年は湯か塩に浸けて見給へと、皆々突返され、自らに朽ちて磯の土とはなりぬ。これを思ふに、人を抜く事は跡続かず、正直なれば神明も頭に宿り、貞廉なれば、仏陀も心を照す。

平安朝時代には、日本人の方が言い約束も違えず、律気であつた。『竹取物語』にある火鼠の皮衣の話。注文者の阿倍の御主人は一面識もない唐商の玉卿に皮衣の前金を届け、不足金だという五拾両も相手を信じて直ぐ渡しているが、玉卿は偽物を届け、掛巧巧妙に全額を取り上げているのである。時移り、世は變つて、近世にな

ってからは、唐人の方が商業意識に誠意を籠めていて、「狡こさは日本」と成り下がっているのは、今昔の感ありといっている。第一次世界大戦当時から、その後の好況時代にかけて日本品の粗製濫造に対する非難が高かったが、南洋向のメリヤスシャツの釦が糊付けであったという例もある。平和になってからも、トルコの駐在武官が東京の丸善の手を経て鉛筆を取り寄せたところ、その大半は両端のみに芯のある不正品であったという話もある。丸善の罪ではなくそれへ品を納める製造元の悪徳に外ならんが、いずれにしても日本人の所業であることに変わりはない。いやな話である。

西鶴の作には、細かい数字を挙げて写実味を見せたところが実に多い。興味本位の、数字弄りに過ぎる嫌いがないでもないが、文献としての価値の一部はそこにあるともいえよう。浪人者が、食うには困らないが徒食するのめどうかと、神田明神の前に瀬戸物屋を出し、百の物は百と掛値なしにいい、値切ってもまけないので、

そもそもより摺鉢九つ、肴鉢十三、皿四十五枚、天目二十、徳利七つ、油さし二つ、三年あまりに一も売れず。これを思ふに商い上手はあるものなり。(『永代蔵』)

このほど伊勢の山田の者として、十年切って抱へたる十四になる小者、坐りし膳を二三度戴き、飯食はぬ前に十露盤置いて、…：されば今日の鯛の焼物、一両二分にて背切十一なれば、一切の値七匁九分八厘づつに当るなり。小判は五十八匁五分の相場に仕る算用してからは、銀を噛むようなるものなり。(同)

春のべの米を京の織物屋仲間へ、毎年の暮に貸し入れの肝煎きもいりして、この間銀を取り、定まって緩々と節季を仕舞ひけるが、

一石につき四十八匁の相場の米を、三月晦日切にして五十八匁に定め、年々貸しけるに、諸職人相談して、一石四十三匁の利銀三ヶ月に出すことは、云々。(『胸算用』)

挙げれば切がない。こういう類は、三種の町人物、他の世話物・武家物の到るところに満載という有様である。

元禄町人の日常生活・経済生活の種々相は、まだおびただしく広範囲にわたり描かれている。元禄武士の武士道というよりも武士気質、その悲喜様々の生活も、活写されている。文が難解であるとして敬遠されている点もあるが、読み砕き、読み馴れば親しみが湧く。イギリスには諷刺作家としてアディソン(一六七九)やステイール(一六七九)などがいた。西鶴とほぼ時を同じうしているが、内容の面白さ、複雑さ、文品の高さ、深さは、西鶴の方が遙かにすぐれているといいたい。古いことをいえば、「英国民は印度を失うともシェイクスピアを失うを好まず。」とカーライルが褒め称えたシェイクスピアの諸作は、わが紫式部の『源氏物語』より約六百年後のロマンティズムの作品である。シェイクスピアの死は一六一六年、紫式部は藤原道長の頃の人であるから、西暦でいえば一〇〇〇年頃に当たる。しかも『源氏物語』は当時の宮廷生活・貴族生活の実相を描いた写実小説で、ヨーロッパでは十八世紀の末から十九世紀の始めにかけて芽生えた写実小説に先立つこと正に九百年の大作なのである。自国のものを軽視することなく、あらゆる角度・部面から古典を再検討するようにしたいものである。